特42
915

○山海を經て
ども備羽逸英の
一服の吹烟は
自由なる開化仁政の
▲御代とうくとうくとうくとうくと
家業専要とうくとうくとうくと
次へ

江村孝吉
番頭小兵工

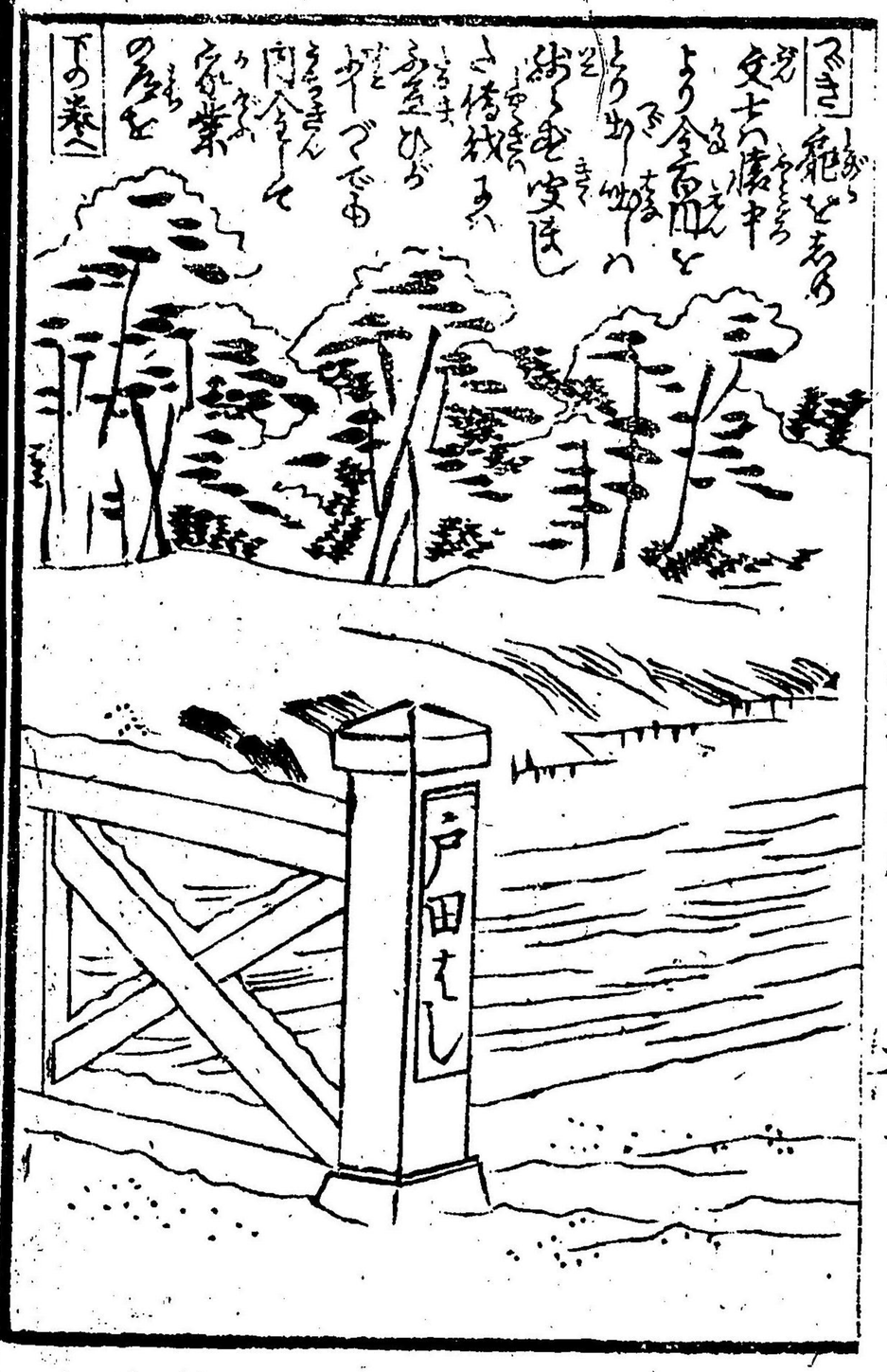
つゞく
すくなくとも長く年に一回
うらを出かけて
なるべくあたらしい
名所あり人様名の山
遠くより一伊香保へ
の差かゝり湯治の
なるべく本
書が家より脱出
今日逗留の毛へ
日出の新傷より
白銀屋交七と云家業へつけ
手に実へ手紙の寄せ
仲居の清八くよ
ごとふ行とおもへ
湯出る温泉あと
と山程
本書人
書生ぐるみ
足と止あるあるとい
つゞく

文七ハ鈴ヶ森の仔細の
文七
次へ

右中仙道
左忍行田

つれ　保の
おぢ　保ノ丞
保ノ丞
侯ノ
と連
歯の
そりや
の
利よ
我〳〵
世よ
身のうん
保ノ丞
涙の
幸ひ

つづき
びく太郎の極言ひ「と途
の川もとめぐみ「我と
特と女夫づま「そん
あつ恐らぐ我夫
「あ花茶屋と
上ア黄泉へ
大ア多と女夫
泥の多ア人へイ
ぎそて南
あまぐ
泥の深泥
松の多ア
▲死ぬんと
▲文七ガ昆平
の花屋ハ
文大切ア金と
と出さぐと二人の
徒も法ぐ
をうも
月ア
まと▲
入く
つづく
九



一 新板二冊袋入	六十番	一 新板開化ものがたり	三十番
一 合本二冊袋入	十二番	一 白縮緬	三十番
一 中半紙文字引等	品々	一 色の小布 墨の小布	品々
一 切紙上中代紀	百番	一 かな双六	品々

書物錦絵地本 問屋

東京横山町三丁目

文 辻岡屋文助